

自由主義と労働者教育：19世紀中葉ドイツにおける 労働者(教育)協会の歩み

太田, 和宏
北海学園大学経済学部

<https://doi.org/10.15017/3746>

出版情報：経済學研究. 70 (4/5), pp.178-210, 2004-04-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



自由主義と労働者教育

—19世紀中葉ドイツにおける労働者（教育）協会の歩み—

太 田 和 宏

I. はじめに

1. 自由主義における自由とは、「・からの自由」と「・への自由」の両局面を含むものであり、後者が古代ギリシアの市民意識に淵源を發することはつとに知られている¹⁾。そこでは各人が、自由（というよりはむしろ権利）を自由に行使できるはずであったが、その前提として各人の知的・肉体的・倫理的および経済的な能力が暗黙裡に想定されていた。「フィクションとしての自由主義」と揶揄されるゆえんである。しかるに、ヘーゲルのいうように、歴史の進歩とともに自由を享受できる層が下に向かって広がった²⁾とはいえ、社会の下層の人々に自由行使の前提条件が欠けていたという点では、古代ギリシアと近代との間にそれほどの違いはない。諦念をもって歴史を見るのではなく、あるいはリバタリアンとしてではなく、自由主義に価値を見出す者にとっては、自由を行使できない人々が現存する状況をどのように克服する

のかという課題が、ほとんど不可避的に生起する。この課題の解決をめざすことは、一種の理想社会論（ユートピアニズム）を内包することになる³⁾。これが「自由主義の解放理念」⁴⁾と呼ばれるものである。こうした傾向は、とりわけ近代自由主義の初期局面（初期自由主義）において顕著だったことが、ガルやフレックによって指摘されている。

彼らによれば、初期自由主義とは本格的工業化以前の手工業者的経済の現実を反映しており、そこから生まれた未来社会像は「『中程度』の存在から成る無階級の市民社会、回顧風に定式化すれば、家父長制的な基礎の上に、職業身分的に組織された、前工業的な中間身分社会」というものであった⁵⁾。だがガルによれば、1840年代に、とりわけ三月革命の中で、現実の歩みがこうした方向とは全く異なる方向に進んでいることが明白となり、それに応じて自由主義陣営の中に三つの異なる反応がはっきりと分

1) ヘーゲル『歴史哲学講義』(下)(長谷川宏訳)岩波文庫、1994年、J・S・ミル『自由論』(早坂忠訳)中央公論社『世界の名著』49、1979年、F・A・ハイエク『市場・知識・自由』(田中真晴・田中秀夫訳)ミネルヴァ書房、1986年、アイザイア・バーリン『自由論』(小川晃一・小池 一・福田歆一・生松敬三訳)みすず書房、1971年、同『ある思想家の回想』(河合秀和訳)みすず書房、1993年など。

2) ヘーゲル同上訳書。

3) マックス・ヒルシュは「未来の社会的な建物は教育と協同組合の支柱の上に建つだろう」と述べた。

Gewerkverein, Nr. 53/31.12.1871, S.209f.

4) Hans-Georg Fleck, *Sozialliberalismus und Gewerkschaftsbewegung. Die Hirsch Duncker-schen Gewerkvereine 1868-1914*, Köln1994, S.97, S.103ほか。

5) Lothar Gall, *Liberalismus und "bürgerliche Gesellschaft". Zu Charakter und Entwicklung der liberalen Bewegung in Deutschland*, in: L.Gall(hrsg.), *Liberalismus*, 2., erw. Aufl. 1980, S.176

岐した。彼はそれを教典派 (dogmatische)、御都合主義派 (opportunistische)、見直し派 (revisionistische) と名づけた。19世紀ドイツ自由主義の鳥瞰図を得るに便利なこの個所は、山井敏章氏も要約紹介しているのだが⁶⁾、いくぶん不正確だと思われるので、以下少し長くなるが訳出しておこう⁷⁾。

「教典派の見解はロテック (Rotteck) 的な起源をもつ『旧自由主義者』によって代表されるが、同時にいわゆるラディカル派の圧倒的多数によっても代表されている。彼らは自己の期待に反する経済的・社会的な『誤った方向への発展』の原因を、官僚制的な公益国家 (Anstaltsstaat) による社会と経済のかの部分的近代化に求めた。そして彼らは当初からそれを克服すべく闘った。この部分的近代化とは、まさしく王政復古期 [=三月前期—引用者] においては、現存する社会的諸勢力とその調整メカニズムを政治的に抑圧することによって、ことによるとその不吉な結果が制約もなしに展開しえたかもしれないようなものだったのである。旧来の政治的・社会的な権力・支配地位を守るために、いわば外から社会に押し付けられたこの『誤った方向への発展』に対する唯一の処方箋を、彼らはここで依然として社会を思い切って政治的に活性化し、流動化することに求めた。その場合、当然ながら不可避免的に問題が—多くの者がその後革命の経過を通じて否定的に対応し、彼らを諦念へと導いた問題が—生起した。すなわち、この『誤った方向への発展』を通じて、彼らの期待を失敗と宣告するもはや克服しがたい新事実が、仮にあまり作り出されていなかった

にせよそれはどの程度までなのかという問題である。これに対して御都合主義派の見解は、旧自由主義の解釈モデルを放棄して、この発展をいわば自然発生的とみなし、ひどく公式的に理解した自由主義の諸原理の意向に沿って、この発展に対する介入をすべて根本的に許されないものとみなすことによって、この問題のある意味で回避した。しかしこのことは同時に、どのような立場からそれが提起されるにせよあらゆる切実な改良から自己を隔絶することを意味し、そしてまた社会生活の幅広い領域の『私営化』 ("Privatisierung") と政治生活領域の狭隘化を意味した。それらを初期自由主義はそのような形では知らなかったのだが。実際にはこれはすべて、新しい階級社会を正当化するという結果に終わった。それを旧自由主義はともかくも、特定の権力地位の利害に沿った誤った方向への発展と決め付けたのである。もちろん彼らがそれを克服しうる何らかの現実的な考えをもっていたわけではなかった。未来の『普遍的身分』としての市民、来たるべき『無階級の市民社会』の前衛としての市民、という旧自由主義の考え (それは前工業的な時代、そしてまた社会的・政治的に見て多くの面で前革命的な時代の、特殊な状況に基づいていたのだが) も、今ではますますイデオロギーと化すにいたった。すなわちその背後には、いまや経済的・社会的にますます強力になりつつある新しい有産市民層の要求と利害が隠されていたのである。

私が見直し派と名づけた第三の反応は、産業革命の開始という時代のなかで根本的に変化した、また本来の自由主義者の期待にまったく反する、経済的・社会的状況を前提とし、しかも48年革命の失敗後の状況に市民の大部分が御都合主義的に適応していったことに対して対決す

6) 山井敏章『ドイツ初期労働者運動史研究』未来社、1993年、21ページ以降。

7) Gall, a.a.O., S.173ff.

るなかで形成された。もちろんドイツでは、見直しおよびそこから生じる新綱領への賛同を公言するこのグループは、50年代・60年代の、市民にひときわ有利に推移する経済的繁栄の時代にあつては、きわめて小さかった。しかも彼らには、イギリスの自由主義にジョン・スチュワート・ミルやとりわけジョン・ブライト(John Bright)、フランスのそれにはアレクシス・ドゥ・トクヴィル(Alexis de Tocqueville)やエドアルト・ラブレイ(Edouard Laboulaye)がいたのとは異なり、慧眼で際立った唱導者がいなかった。もちろん英仏といえども彼らの影響力ははじめは比較的小さかったのだが。しかしともかくも、見直し派の見解はゴットフリート・ゲルヴィヌス(Gottfried Gervinus)やシュルツェ＝デーリツチュ(Schulze-Delitzsch)によって展開されたのであり、その発端もいずれにせよ彼らにおいて捉えられる。その核心は以下のような認識にある。すなわち、まさしく無階級の市民社会という目標を堅持したいのなら、ますます激化する対立をはらんだ新たな社会状況が現存するようになったことを考えれば、社会状況への積極的な介入の拒絶を伴う社会的な進化楽観主義から解放され、積極的な社会政策を推進することが重要だということである。しかしこのことは当然ながら、自由主義が有産市民への一方的な執着から解き放たれたときにのみ、正しい方向へと進みうる。というのも、有産市民の利己的なグループ利害はますます、自由主義の本来的で始源的な目標の妨げとなっているからである。その代わりに自由主義は、かつての18世紀の市民のように今社会的政治的同権化のために闘っている人々と結びつかなければならない。このように見直し派は考えるのである。]

しかしながらガルによれば、19世紀後半を通じて第三のグループはきわめて小さく、自由主義の社会的基盤を教養・有産市民層の外側に拡大しようとするその試みはほとんど成果を上げなかった。彼らに代わって勝利したのは、「旧自由主義者の観念世界」であつたが、そこには「いまや純然たる階級イデオロギーと化しつつある、有産・教養市民の政治的指導権の理論的な正当化と擁護」と、「社会保守主義的な原理へとなりさがりつつある、あらゆる社会干渉主義の拒絶」とが、いわば同居するにいたつたのである。そしてこの考えを教典で凝り固まった多くの左翼自由主義者も長い間共有したのであつた。

山井氏は省略しているが、実はガルの以上の指摘は次のような重要な認識を示すためにこそあつたのである⁸⁾。

「その後1873年恐慌とその結果は、こうした〔見直し派の一引用者〕努力を最終的に失敗と判定した。いうまでもなくフリードリヒ・ナウマン(Friedrich Naumann)とマックス・ヴェーバー(Max Weber)によつてはじめて、工業社会とその特殊な社会的編成への移行の過程は不可逆的であるという認識が広く認められるようになった。そして一般的にいえば、自由主義の更なる没落を食い止めることは、その代表者が生成しつつある工業社会の内部で今やとにかく彼らに割り当てられた地位、すなわち市民階級の代表者という地位を、内面的に引き受けること、そしてそこから決然としてこの工業社会の『市民化』、したがってまた工業的中間層社会の創出(そうなったとき自由主義はその社会の当然の代表者になるであろう)をめざして努力

8) Gall, a.a.O., S.176f.

することによってのみ可能であるという結論をそこから引出した者こそ、ほかならぬマックス・ヴェーバーだったのである。」

20世紀の工業諸国が大筋においてヴェーバーの方向で進み、その中で自由主義が福祉国家容認派とリバタリアンとの分裂を抱えつつも再生に成功したと捉えることは可能である。だがここで私が扱うのは、工業化開始に伴う初期自由主義の変容と危機のなかでガルのいう見直し派が果たした役割と意義である。ガルはこのグループの基本特徴を「積極的な社会政策」の推進に見るが、この捉え方では部分的には誤解の余地があり、また重要な他の特徴を排除している点で、不十分といわざるをえない。

誤解というのはこうである。たしかに見直し派は、工場法的な意味での労働者保護については積極的な国家介入、したがってまた社会政策を求めたが、ビスマルクの労働者保険の意味での社会政策については、労働者の自主的な相互扶助活動を圧迫するという点からはなほだ懐疑的であったということである。

また排除された重要な特徴とはこうである。工業化とともに増大する工場労働者ならびに没落する手工業者が、自由行使の前提条件を欠如しているという顕著な事実と直面した自由主義者は、社会問題としての労働者・手工業者問題に取り組む必要に迫られた。このことを自覚した自由主義は、ドイツではむしろ「社会的な自由主義」とか「社会自由主義」と呼ばれるのが普通である。「協同組合の父」シュルツェ＝デーリッチュはその先駆者であり、マックス・ヒルシュ (Max Hirsch) や多くの南ドイツ自由主義者も同じ道を歩んだのであった。当時の労働者・手工業者の運動には知識人の指導と援助が不可欠だったのである。彼ら自由主義知識人に

とっては、労働者が自由を行使できるまでに「上昇」するための基本的手段は、自助と教育であった。自助と教育を通じて人間の道徳的完成を目指すこと、ここにこそ自由主義の真骨頂があったのであり、社会政策はむしろ補助的手段と位置付けられていたとみてよい。

啓蒙思想、とりわけフンボルト (Wilhelm von Humboldt) の全人教育という理想の影響を色濃く受けた初期自由主義にあっては、自助と教育による向上の方式は個人主義的な特徴をもっていた。つまり、個々人が自己の努力と責任でそれぞれに向上することが期待されたのである。それはまさに小営業的な市場経済モデルに合致していた。しかし、工業化の進展は、手工業者の没落と貧窮の工場労働者の生成を大量現象として出現させ、個人主義的自助の限界を露呈した。ここに、シュルツェを先駆けとする社会的自由主義派は、自助と教育による向上という自由主義の基本理念を生かしながら、それを集团的・連带的におこなう必要に迫られた。シュルツェが生涯を捧げた協同組合運動はそのような意味付けを与えられたし、また労働者教育協会の運動もそうした理念に支えられていた。本稿は後者の運動の概要を明らかにするという課題の手始めとして、生成から没落までのその歩みを概観したい。

2. 労働者教育協会の歴史については、これまで多くのドイツ人論者が言及してきた。それは単にそれがドイツ労働運動生成史の重要な一齣だからというだけではない。1863年5月ラサール派の「ドイツ一般労働者協会」(ADAV) が雑然とした協会運動の中から分離独立したあと、それに対抗する形で形成された多数派の「ドイツ労働者協会会議」(VD AV) のなかで、市民主導派と労働者独自性派の対立がし

だいに先鋭化し、やがて後者からベーベル (August Bebel)・リープクネヒト (Wilhelm Liebknecht) が指導するアイゼナッハ派が形成されるという、ドイツ社会民主主義の中核部分の形成史として、それはいっそう多くの注目を集めてきたのである。したがって論者の多くは社会主義の立場から市民的自由主義派を批判するという価値観に立ち、論議の内容も教育問題よりはむしろ協会が携わったその他の広範な問題、とりわけ普通選挙権、組合的利害代表、協同組合と相互扶助活動、機関紙・組織問題などにより多くの注意を向けてきたといつてよい。本稿は、そうした立場を退け、上で述べたような関心から市民的自由主義派に光を当て、協会の中で彼らが教育をどのように位置付け、論議し、また実践したのかに着目したい。また、ドイツでの議論の多さに比べ、日本ではこの問題があまり知られていない状況⁹⁾にかんがみ、できるだけ正確に紹介することを旨とした。

II. 労働者（教育）協会の歩み

1. 三月革命前期

三月前期のドイツ手工業職人にとって遍歴は一般的であり、その一環として外国遍歴もおこなわれていた。たとえば1830年代から40年代にかけて、スイスには平均1万人、パリには1.5万人から2万人、ロンドンには少なくとも1万人のドイツ人職人が滞在していたという¹⁰⁾。言語

や住宅や雇用の必要から、彼らの間に助け合いのための団体が生まれていった。パリでは32年に「ドイツ国民協会」(Deutscher Volksverein)が結成され、それが弾圧などで秘密結社となって先細ったあと、37年には「義人同盟」(Bund der Gerechten)が生まれ、スイスでも33年に最初の手工業者協会が作られ、その後各地で同様のものが生まれた。それらのなかでブリュッセル、ロンドンなど一部の協会では共産主義的な影響が強まりもしたが、労働者教育協会にとってはスイスの手工業者協会が重要であった。というのも、そこでは扶助活動とともに教育活動に特に力が注がれたからである。教育の中味についてみれば、たとえば1839年にスイス人を含めて150人以上の会員を擁したジュネーヴの協会は、自然史、文法、歴史、地理、図工、フランス語の授業を活発におこなったほか、歌唱などの文化活動、個々人の職業継続教育、さらには娯楽や社交にいたるまで幅広い活動を展開したようである¹¹⁾。ビルカーによれば、協会の初期指導者には3つのタイプがあったという。すなわち、①ヴィルヘルム・ヴァイトリング (Wilhelm Weitling) を典型とする知的な手工業者、②市民の出自でありながらそこを脱し、労働者運動に身を投じた亡命者¹²⁾、ここには怪しげな人物と真の理想主義者がいた。③それ自体の発展のためではなく、一般的な政治目的のために労働者運動を利用しようとした知識人、というのがそれである¹³⁾。こうして外国におけるドイツ人手工業者協会は、職種別・ツunft別の分

9) 労働者教育協会の実態について多少とも触れているものとしては、島崎晴哉『ドイツ労働運動史』青木書店、1963年、第五章、山井前掲書、第四章、村上俊介『市民社会と協会運動—交差する1848/49年革命研究と市民社会論』御茶の水書房、2003年、第三章、くらいしか今のところ見当たらない。

10) Karl Birker, *Die deutschen Arbeiterbildungsvereine 1840-1870*, Berlin 1973, S.21

11) *Ibid.*, S.24

12) 亡命先のチューリヒで労働者教育協会の講師となったリープクネヒトがその典型であろう。

13) *Ibid.*, S.29

裂を克服し、職人たちが広く互助と教育のために結集するという開放的な連帯感を形成していた。

一方ドイツ国内では、19世紀初めころから、書籍商人が新刊の書物をメンバーに貸出す目的で組織した読書協会(Lesekabinette od. Lesevereine)が普及し始めていた¹⁴⁾。啓蒙主義の影響の下で、広く学問・芸術の涵養・吸収をめざして設立された上層市民の「博物協会」(Museumsgesellschaften)も内部に読書協会を抱えるようになった。読書協会はやがて手工業者を受容したり、下層民のための独自の読書会を組織したりして、下層への広がりを見せた。また、書物を買う余裕のない人々にとって、公設図書館は重要な意味を持った。しかし19世紀初頭に設立された「市立図書館」(Stadtbibliotheken)は、役人など一部のみに利用が制限され、下層民には開放されないものが多かった。そこでザクセンを先駆けとして1830年ころから「民衆図書館」(Volksbibliotheken)が作られるようになり、三月革命でもその普及が重要な要求となった。しかるにアメリカなどと比べると民衆の利用できる公設図書館は遅れたようで、60年代には労働者教育協会が独自の図書室をもつようになる。ほかに「大衆書物普及協会」(Verein zur Verbreitung von Volksschriften)や、学校教員による新聞の読み聞かせ会が、下層民への活字文化の普及に貢献した。さらにこの時期、利益代表と職業教

育を目的として設立された営業・手工業者協会(Gewerbe-und Handwerkervereine)が、学校教育の不備を補うために日曜学校(やがて夜間学校)を開設する事例が見られた。だがここでは、それぞれの仕事に必要な基本的知識が教えられただけで、一般教育を含む広い意味での成人教育へと発展するためには、別系統の啓蒙的理念が合流せねばならなかった¹⁵⁾。

こうした状況の中で、外国の協会では職人と知識人が密接に協力しているという情報および経験が、帰国手工業者によってもたらされ、広められた。そして彼らを触媒として教育を第一義的課題とする本来の労働者教育協会、あるいは手工業者教育協会が生まれたのである。ここでは、職人と知識人のみならず、ルールで労働者教育に力を注いだフリードリヒ・ハルコルト(Friedrich Harkort)のような企業家も重要な役割を果たしていた。彼ら自由主義的企業家にとっても「下層階級の市民化と解放」¹⁶⁾は避けて通れない課題だったのである。こうして1840年1月、「日曜と週日の幾晩かに読書会、社交、講演会、授業を通じて若者を感化する」¹⁷⁾ために、オスナブリュックで400人が参加して手工業者協会が設立された。その後三月革命までの時期に設立された各種協会では把握できたものについて、ビルカーは協会の性格も含めて次の一

14) 以下、Frolinde Balser, *Die Anfänge der Erwachsenenbildung in Deutschland in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, Stuttgart 1959, S.49ff. 同書の巻末資料に各種教育機関の設立状況が載っている。紙幅の都合で一部を割愛し、読書協会、図書館、教育協会のみを一覧表として末尾に掲げる。読書協会では30年代から「職人のための」ものが現れ、図書館でも「民衆図書館」が同時期に出現することが注目される。

15) ほかに体操協会や歌唱協会もあった。体操協会については、有賀郁敏氏の「西南ドイツにおけるトゥルネン協会運動—1840年代のシュヴァーベンを中心に」、望田幸男・村岡健次監修『近代ヨーロッパの探求⑧・スポーツ』、ミネルヴァ書房、2002年所収、ほかの一連の研究がある。

16) Friedrich Harkort, *Bemerkungen über die Hindernisse der Civilisation und Emancipation der unteren Klassen*, (Originalausgabe Elberfeld 1844), Frankfurt am Main 1919; Ders., *Schriften und Reden zu Volksschule und Volksbildung*, Paderborn 1969

17) Harkort, *Bemerkungen*, S.41

覧表を示している¹⁸⁾。

1843年	シュテッティン、手工業者協会
1844年	ベルリン、手工業者教育協会 マンハイム、手工業者協会 (1847年解散、48年再建)
1845年	ハンブルク、労働者教育協会 キール、営業協会
1846年	マグデブルク オルデンプルク ヒツァッカー アルトナ ダンツイヒ ルッケンバルデ、手工業者協会 ケムニッツ、機械工協会 エルバーフェルト ブレーメン
1846/47年	ライプツィヒ
[1848年以前]	ブレスラウ、労働者歌唱協会 ミュンヘン、労働者教育協会 ヴィーン、労働者教育協会

主要な手工業都市で三月革命に向かって協会の組織化が前進していた様子がうかがえる。これらの都市は60年代の高揚期にも中心となる。数百人を擁する規模の大きい協会もあったようだが、会員数の変動が大きかったことも報告されている。また後にも触れるが、これらの協会は教育活動のほかに相互扶助、協同組合など多面的な活動を展開しており、60年代までは多かれ少なかれ複合的な性格を持っていた。その複合性を考慮して、はじめから労働者協会と名乗る場合があったし、また各種協会を総称してそ

う呼ぶ場合もあった。ただし注意を要するのは、その場合、労働者とは狭義の工場労働者を意味するのではなく、手工業者を含めて広い意味で勤労する (arbeitende) 人々を指していたことである¹⁹⁾。

こうして新しい啓蒙的な協会が増えるにつれて、それまで職業教育活動しかおこなってこなかった既存の手工業者協会、営業協会などで成人教育活動に進出するものも現れた。だがそこでは、職業的継続教育に重点がおかれたようでは、自由主義市民の指導のもとで基礎教育・一般教育を重視する教育協会とは微妙なずれを抱えていた。この相違は、労働者自身が求めるものとも絡んで、自由主義的教育運動内部におけ

19) オフファーマンはコンツェの「ペーベルからプロレタリアートへ」のシェーマに依拠しつつ、19世紀中葉の労働者概念の多義性と変化とを指摘する。すなわち、30年代の工業化の開始に伴い農村から都市へ下層民の移動が生じ、大衆貧窮の概念がペーベルからプロレタリアートへと転換する。後者が無資格で農民や手工業者よりも地位が低かったのに対して、「労働者」は「行儀よく、勤勉で、几帳面なタイプ」として現れ、物質的改善と相対的安定性の点でプロレタリアートとは区別された。「労働者」自身の自己認識や官庁、市民の捉え方も同様で、そこには一種の名誉概念さえ含まれた。しかし遍歴職人を媒介としつつ三月革命で独自性を強めると、「労働者」という言葉から初期のエリートの性格は消え、また手工業者にとっても同義語になっていった。そのため当時の多様な用い方を統一的に理解するためには、広義のそれは自営業を含むもの、狭義のそれは職人、補助者、工場労働者、非自立親方のみ、となる。コンツェは手労働階級を農民、親方から日雇いまでを包括するものとしているが、親方とプロレタリアートは周縁部を形成するのであって、本来の労働者身分は(a)手工業職人、(b)手工業資格はもたないが熟練の工場労働者、から構成されると見るべきである。しかしいづれにせよ40年と70年の間には、重心移動を伴いつつも、労働者という概念の複合的性格自体は本質的には変化しなかった。以上である。Toni Offermann, *Arbeiterbewegung und liberales Bürgertum in Deutschland 1850-1863*, Bonn 1979, S.20ff. 全体とすると興味深い指摘であるが、「本来の労働者身分」の捉え方は、逆にやや狭すぎるように思われる。同書の523ページに労働者協会メンバーの中の「雇用主」の比率が50.1パーセントと示されているのだから、自身の「史実」とも矛盾する。

18) Birker, a.a.O., S.35f.

る実用重視対理念重視という対立となって長く尾を引くこととなる²⁰⁾。ともあれこうして多様な成り立ち、名称、内実を抱えつつも、この時期に組織化が大きく進展し、三月革命期と60年代における労働者教育協会運動の高揚の土台を形成していった。

ところでナーマンによれば、ドイツ全土で組織されていた協会は、その設立期には大きく三つの地域モデルに分類でき、それが三月期の統一的労働者団体である「労働者友愛会」の組織形態に作用したという。南ドイツの協会に影響を及ぼしたスイス・モデルでは、遍歴扶助が大きな意味を持ち、三月期の「労働者友愛会」は分権的性格を強めたのに対し、ロンドンから影響を受けた北ドイツ・モデルでは大衆の獲得が重視され、「友愛会」も集権的・統一的に形成され、またパリからの感化を受けたライン・モデルでは初めから政治的行動に力点がおかれ、三月期には「友愛会」を作る代わりに一連の協会が政治化したのだとされている²¹⁾。こうした形成期における地域ごとの特徴は、三月期のみならず、60年代の分裂と対立にも影を落としていた。

2. 三月革命期

20) オッフアーマンは、教育協会に参加する労働者の動機は様々であったが、次の3つにまとめることができるとしている。すなわち、「よりよい職業上の資格の獲得による社会的上昇、市民的同権化の前提としての個人的な教育水準の向上、社会政策的な改良を実現するための社会的モデルの現実化をめぐる討論とそのための労働者の組織化」である。Offermann, *a.a.O.*, S.280 社交や娯楽に対する欲求も加えたほうが良いように思われる。

21) Shlomo Na'aman, *Arbeitervereine, Arbeitertage und Arbeiterverband - drei Etappen auf dem Weg zur Arbeiterpartei*, in: Dieter Dowe(hrsg.), *Berichte über die Verhandlungen der Vereinstage Deutscher Arbeitervereine 1863-1869*, Berlin/Bonn 1980, S.XI

三月革命が勃発すると、第四身分の連帯の意識が高まり、各地で協会が新たに叢生した。それらを糾合して全国的な組織を作ろうとする気運がベルリンで盛り上がり、その指導者には植字工シュテファン・ボルン (Stephan Born)が抜擢された²²⁾。

ボルンは1824年にポーレン州リサのユダヤ人仲買人の子として生まれ、ギムナジウムに進学したが、経済的理由から勉学を断念し、兄が大学生活を送っているベルリンで1840年から45年まで植字工の修行を積んだ。一人前になるとベルリンの手工業者協会に所属し、すぐに頭角をあらわしたという。46/47年の冬にはパリに出かけ、マルクスやエンゲルスと知り合った。その後ブリュッセル、スイスを回って再びパリにもどったとき、ドイツから三月革命の知らせが届いた。彼はすぐにベルリンに戻り、組織の統一と拡大に着手した。彼もまた、典型的な知的手工業者類型に属していたことがわかる。

ベルリンからの呼びかけで、6月18/19日に、「ドイツ手工業者・労働者(教育)協会会議」(Kongreß deutscher Handwerker-und Arbeiter(bildungs)vereine)が開かれた。そこには全国から31の協会が参加した。地域的には北部・東部の比重が高かったが、フランクフルト、シュトゥットガルト、マンハイム、ミュンヘン、ニュルンベルクなどライン、南ドイツの協会も加わっていた。組織統一を前進させるために8月に再度の会議がベルリンでもたれ、「ドイツ一般労働者友愛会」(Allgemeine deutsche Arbeiterverbrüderung)の設立が決定された。友愛会には各地の協会が組織加入するのを原則とし(組織加入できないときは個人加入も可)、

22) 以下ボルンについては、Birker, *a.a.O.*, S.39

その執行体制は、地方委員会、地区委員会、中央委員会の三層の構成となった。活動は各協会の独自性が前提とされ、その上で全国的な連帯、とりわけ扶助金庫・遍歴扶助・職業紹介などの扶助活動の強化、協同組合の強化・協力がめざされた²³⁾。中央本部はライプツィヒに置かれ、機関紙『友愛』("Verbrüderung")も刊行された。49年1月にはハイデルベルクで会議を開いた南ドイツの主だった協会が、友愛会に合流し、全国的性格をいっそう強めた²⁴⁾。

こうして49年の上半期には運動が高揚したが、まもなく政治的騒乱に巻き込まれることになった²⁵⁾。ボルンはドレスデンの5月闘争に関与したかどでスイスに亡命し、後を継いだ測量技師のフランツ・シュヴェニガー (Franz Schwenniger) も逮捕された後、ライプツィヒから追放された。しかし植字工カール・ガングロッフ (Carl Gangloff) の献身的努力で組織と

機関紙は維持され、50年2月には友愛会としての最初で最後の全国大会がライプツィヒで開かれた。大会にはバーデンとライン・ヴェストファーレンを除く各地の地区委員会や協会から24人の代議員が参加したほか、加入を申請している各地のタバコ労働者協会からの代表6人も参加し、それがすぐに認められたため、総勢30人の代議員となった。大会では新しい中央委員会が選出され、規約の一部改正がおこなわれた。友愛会運動は陣容を立て直し、再び前進するかに見えたが、大会の直後には激しい弾圧が待っていた。

当局は友愛会を、衣の下に共産主義の鎧を着た二重性格の組織と見ていたが、ヴァイトリングの策動を排除したこと、指導者たちは共産主義とのつながりをほとんど持たなかったこと、規約や後に見るいくつかの公的発言、などから見てそれは思い過ごしであった。共産主義の「危険性は現実のなかよりも役人の頭の中にあつた」²⁶⁾のである。しかしながら弾圧は容赦なくおこなわれた。各地で協会は強制的に解散され、中央委員会や地区委員会も解散を宣言された。二人の新中央委員は追放され、機関紙は発禁となった。最後まで活動した中央委員ガングロッフは、懲役4年、禁固11ヶ月の判決を受けた。こうして最初の全国的労働者組織は、わずか2年で瓦解した。

組織の実態については多くを知ることはできない。バルザーによれば、ライプツィヒの全国大会の代議員は15404人の会員を代表し、委任状を送った協会を含めて約18000人の会員がいたという²⁷⁾。雇職人を含む手工業者が大部分で

23) Grundstatuten der deutschen Arbeiter-Verbrüderung, in: Frolinde Balsler, *Sozial-Demokratie 1848/49-1863. Die erste deutsche Arbeiterorganisation*, Stuttgart 1962, S.507ff.

24) Die organisatorischen Beschlüsse des Heidelberger Provinzialkongresses, 29.1.1849, in: F. Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.585f. 三月革命期の労働者友愛会については、バルザーの前掲著とその第二巻資料集が圧倒的に詳しい。また柳沢治『ドイツ三月革命の研究』岩波書店、1974年、235ページ以降、とりわけ298ページ以降も参照。さらに友愛会における協同組合運動の側面については、山井前掲著第一章が詳しい。また、林健太郎「三月革命と社会主義」、『西洋史学』第11号、のち同『ドイツ史論集』中央公論社、1976年、末川清「1848年秋の『労働者友愛会』の立場—『社会問題』と民主主義の関連—」、『立命館文学』第386-390合併号、のち同『近代ドイツの形成』晃洋書房、1996年、ほかにラインの政治的協会を扱ったものとして増谷英樹『フランクフルト労働者協会』と9月蜂起、良知力編『共同研究』1848年革命』大月書店、1979年、などがある。

25) 以下の経緯については、Birker, a.a.O., S.41ff.; Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.237ff. またF. メーリング『ドイツ社会民主主義史』(上) (足利末男・平井俊彦・林功三・野村修訳) ミネルヴァ書房、1968年、343ページ以降も参照。ドレスデン5月蜂起とボルンについては、村上前掲書、第四章。

26) Birker, a.a.O., S.42

27) Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.75f.

あった。また会員の平均年齢は25歳から30歳の間で、全国大会代議員のうち既婚者であることを確認できるのは若干名のみとする。

会の目的は、48年8月の決議で宣言されたように、国家の中で労働者を他の市民と同権の地位に置くことであった。それを階級闘争や革命によってではなく、「友愛」を通じて実現しようとするところにこの組織の特徴があった。すなわち、48年秋の機関紙はいう²⁸⁾。「しかしいずれにせよ、わが兄弟である労働者には、よく知ってほしい。我々は蜂起を非難し、あらゆる無秩序に反対する。我々は現政府に反対して陰謀をめぐらさない。我々はただ、共同の祖国の中でしかるべき地位がほしだけである。」

48年8月の決議は確かにその第3部「国家の援助」において、民主的であるべき国家に対して、労働者・手工業者の状態を改善するための、一連の要求を掲げはしたが、会自身の活動の力点はむしろ、第2部「労働者自助」と第4部「民衆教育」に置かれていた²⁹⁾。協会および友愛会が内部に、まだ分離しきらない社会主義・共産主義・民主主義的要素を一部抱えつつも、大筋において自由主義の影響のもとにあった証左といえる。

同決議は教育問題において、「児童を世界市民・国家市民に向けてできるだけ完全に陶冶することをめざして」、14歳未満の無償教育、民衆図書館の設置、学校の国家管理、教員の向上

と待遇改善などを要求に掲げた上で、成人教育については次のように宣言した³⁰⁾。「労働者の科学的陶冶ないしは継続教育全般については、労働者協会および新たに設置さるべき民衆図書館がこれに寄与する。しかし科学的陶冶のほかには工業的な陶冶をも促進するためには、国家は技術教育学校の設置と既存の公的工芸教育施設の拡大に努めなければならない。」基礎教育・一般教育は協会が受け持ち、技術的な職業教育は公的機関の援助に期待するという方向が打ち出されたといえよう。

ボルンも同じ48年に協会自身の教育活動の重要性をこう強調した³¹⁾。「民衆の教育が民衆の自由を保障する。現代のこの偉大な要求にもろ手を上げて賛成しない者がいるだろうか。—しかし学校だけが民衆教育の場所か。酸いも甘いもあわせもつ人生の営み、あるいは幸福と正義をめざす我々の闘いの戦場は、学校が提供するものよりももっと高い要求を我々に課している。そこで我々の時代は、この偉大な課題を解決すべき機関を生み出した。そしてそれはすでに、そのために有効であることを示してきた。—いたるところに作られた職人の手工業者協会がそれである。それは高揚感、権利意識、兄弟愛の栽培場として、また教育と人間性感化の栽培場として有効であることが明らかとなっている。たしかに、それは時期遅れの理念、不適切な要求の栽培場でもあるとして、あちこちでそのような団体に反対の声があがり、それがあちこちでそれなりの根拠をもっているということはあるかもしれない。そうではあってもしかし、まさにそれゆえにこそ、我々はこうした団

28) *Ibid.*, S.55

29) 柳沢氏は、友愛会運動を叙述するさい、この決議の第2部ととりわけ第3部を重点的に分析するが、第4部「国民教育」には触れていない。このことは、この運動に刻印された自由主義的特徴を見逃すことにつながっていないだろうか。これは山井氏にも言えることである。また両氏とも、労働者という言葉をとくに雇職人を含めつつも工場労働者にひきつけすぎているように思われる。

30) Balsler, *Die Anfänge der Erwachsenenbildung*, S.199f.

31) Zit. nach Birker, *a.a.O.*, S.49

体を、その真の高貴な課題、つまり人間の精神的・道徳的向上へと導くように努力したいと思う。」

たしかに友愛会は革命の高揚期に連帯と利益代表の期待を込めて作られたから、政治的色彩を強めてはいる。しかし活動の重要項目として自助と教育が謳われ、しかも末端の個々の協会はこれまでどおり教育協会としての性格を維持していた。友愛会の規約で教育が触れられないのは、それが個々の協会にとっての自明の課題だったからであろう³²⁾。たとえば、ヴェルテンベルクを中心とする南ドイツの協会が50年9月ウルムで総会を開き、「一般労働者友愛会南ドイツ連合」("Allgemeine Arbeiter-Verbrüderung, Süddeutsche Vereinigung")を設立し、つぎの規約を定めたことから、末端にとっての教育の重要性を知ることができる³³⁾。

「第1条：本組織は『労働者のための教育協会』と称する。

第2条：(加盟するそれぞれの—引用者)労働者協会の目的は以下のとおりとする。労働者の一般的・道徳的教育に努めること、あらゆる法的手段によって労働者をすべての市民権の完全な享受へと導くこと、工業と政治の面では彼らを真の国家市民へと教育し、その物質的・精神的利益を力強く代表し、促進すること。・・・」

32) たとえばこの時期のウルム労働者教育協会の規約は、入会資格、入会手続き、会費と扶助規定のあとに、「16.できるだけためになる講義と授業がおこなわれるように」会員は提案と投書の権利をもつと定めている。Lokal Statuten des Arbeiter-Bildungs-Verein zu Ulm, in: Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.589f. またビルカーも、この時期の教育協会の講師には、小学校教員、いわゆる「自由教団」の聖職者、弁護士、書籍商、著述家、学生、商人、工場主など多様な人々がいたという。Birker, *a.a.O.*, S.46

33) Zit. nach Balsler, *Erwachsenenbildung*, S.206

以上から明らかなように、友愛会運動自体が、自由主義知識人と知的手工業者が融合した状況のもとでの、(見直し派の)自由主義の運動であった。50年2月の友愛会第一回全国大会への参加を呼びかける中央委員会の回状もそのことを物語る³⁴⁾。

「これまでどおり現在もかくあろう：

理性はわれらの導き手、
言葉はわれらの武器、
統一はわれらの合言葉、
そして愛はわれらすべてを兄弟として、人間として結びつける絆。」

3. 反動期

50年の友愛会解散によって労働者教育協会が消滅したわけではなかった。協会自身の解散については、その徹底の度合いが邦ごと、地域ごとに異なっていたようなのである。スイスでは協会は自由に存続し、ドイツからの遍歴職人は相変わらずスイスでの経験を持ち帰って、協会再建に役立てた。反動的なバーデン政府は53年3月、遍歴を禁止し、スイスとの国境を閉鎖したが、スイス連邦内閣の抗議で半年後に解除した³⁵⁾。プロイセン政府もスイスへの遍歴禁止、スイス滞在者の即時帰国を命じた³⁶⁾。こうして邦を越えた弾圧の必要性が意識されるようになっていた。そのころ同じく反動的なヴィーン市政府は、協会禁止とあらゆる結社の統一的監視体制を構築するために、ドイツ連邦規模の結

34) Das Vorwort zum Protokollauszug der Generalversammlung, in: Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.527

35) Vorstellung des schweizerischen Bundesrats wegen der badischen Grenzsperrung für Arbeiter, in: Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.594

36) Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.464f.

社法を制定するイニシアティブを發揮した³⁷⁾。その結果、各邦の思惑を調整した上で、54年7月13日に「特に結社に関連して、ドイツ連邦における法的秩序と治安を維持するための方策」

(Maßregeln zur Aufrechterhaltung der gesetzlichen Ordnung und Ruhe im Deutschen Bunde, insbesondere das Vereinswesen betreffend. 通称「54年連邦決議」)が連邦議会で採択された。その第8条はこうだった³⁸⁾。

「さらに共同の安全のために連邦のすべての政府は、自己の領域内にいまだ残存する労働者協会および友愛団体で、政治的、社会主義的、あるいは共産主義的目的を追求するものを、2ヶ月以内に解散させ、同様の結社の新規設立を罰則をもって禁止することが義務づけられる。」

しかしこの決議に対しても諸邦の対応はまちまちだった。オーストリア、プロイセン、バイエルンの三大邦は告示を見送ったため、そこでは法的効力をもたなかった。三邦とも独自の結社法を備えていて、そのほうがましと判断しただけでなく、立法主権の問題も絡んでいたようである³⁹⁾。またハノーファーでは市政府が厳格に実施したのに対し、王国政府はルーズだったとして、バルザーは次のように述べている⁴⁰⁾。

「ハノーファー(市)について、警察長官ヴェルムートは国王にこう報告した(1855年1月23日)。『ハノーファー郊外に本部を持つ労働者協会が存続しつづけてよいかどうかは、長期の観察によって』はじめて明らかになる、と。ヴェ

ルムートはその労働者協会の会長であった石炭製造工A.W.ピックマイヤーを呼び出して、こう告げただけであった。いまや警察当局に監督の権限があること、つきつめれば協会の次の定期的催しを届け出るべきこと、すなわち(1)毎晩おこなわれる授業、(2)毎月第一および第三日曜日におこなわれる決議権のある総会、(3)毎週金曜日に開かれる幹事会、(4)毎月第二および第四日曜日に開催される定期的な『娯楽の集まり』。一同様に、ニーンブルクの『労働者教育協会』(1852年5月3日設立)も存続しつづけた。」

以上の引用からは、労働者協会という名称でもその活動の中心は教育と娯楽であったこと、そのような協会であるならば初めから危険視するには及ばないと考える当局者もいたこと、がうかがわれる。しかしもとよりそこには、ビルカーのいうように協会がわの対応も働いていた⁴¹⁾。結社法と連邦決議によって横の連携と「政治的」であることを禁止された各地の協会は、政治的であることを意識的に避け、教育と扶助に専心するよりなかったのである。そして初めは弾圧に対する戦術として政治活動を自粛したにすぎなかったはずが、いつしか政治は後景に退き、非政治性が自由主義的協会運動の「伝統」にさえなっていた。

多くの組織が解散され、たとえ存続できたとしても孤立分散していたために、50年代の協会運動について全体像を叙述することは難しい。バルザーは北部やザクセンで弾圧が激しく、三月革命の中で叢生した多くの協会が消滅し、生

37) *Ibid.*, S.466f.

38) Der Bundesbeschluss vom 13. Juli 1854, in: Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.598

39) この間の事情については、Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.478ff. を参照。

40) *Ibid.*, S.479f.

41) Birker, *a.a.O.*, S.52 ここで非政治的とは、政治的要求を掲げ、その実現のために行動するのを避けることを意味するが、のちにみるように政党政治から距離を置くという意味での非政治性は、自由主義的運動のむしろ長所であった。

き残ったのはわずかの協会と協同組合のみという⁴²⁾。ビルカーは、にもかかわらず反動期に協会の新規設立が続いたこと、ヴェルテンベルクなど弾圧が緩やかなところでは市民の協力で協会運動が維持されたことを強調する⁴³⁾。だが50年代末には、経済の発展、自由主義的思潮の高まり、シュルツェ=デーリツチュの奮闘による協同組合の拡大などにより、全体として抑圧を緩和する方向へと進んでいったようだ。59年には、44年設立のベルリンの手工業者協会が再建され、引き続いてライプツィヒで「営業補助者教育協会」の設立が企てられた。ここに60年代協会運動の二つの拠点が形成された。とくに後者は総合技術協会(Die Polytechnische Gesellschaft)の協力の下に設立が準備されたが、規約の認可がおりたのがようやく60年12月になってのことで、翌61年2月19日に設立総会が開催された。その様子を当時20歳だったアウグスト・ベーベルが回想している⁴⁴⁾。60年代の「協会会議」の伏線としても重要と思われるので引用しよう。

のちに「労働者協会会議」の議長になり、社会主義政党のリーダーにもなるベーベルは、1840年2月22日ケルン近郊で貧しい下士官の長男として生まれた。4歳で父を、6歳で義父を失い、母の故郷に身を寄せた母子は赤貧の生活を送った。その母もベーベル13歳の時に死んで、残された2人の兄弟は、別々の叔母のもとにひきとられた。義務教育時代のベーベルは、アルバイトをしながらも成績はつねにトップで、歴史と算数を好む虚弱で利発な子供であっ

たようだ。卒業にさいしては進学も、鉱山技師の道も断念せざるをえず、母の友人の夫の下でろくろ細工師の修業をすることとなった。3年間の厳しく不自由な修業ののち、職人資格を得たが、終了の日に親方が死んで、18歳で遍歴の旅に出た。遍歴はほとんど徒歩で、路銀をもらったり、乞食をしたりしながら南ドイツの各地を巡り、仕事にありつくと数ヶ月滞在するという具合だった。当時、南ドイツの各地にカトリック職人協会が存在し、宗派的寛容を特徴としていたために、プロテスタントのベーベルも各地でこれに参加した。そこでは授業や講演もおこなわれ、「一種の教育協会」の役割を果たしていた。2年間の遍歴ののち家路についたベーベルは、故郷でユダヤ人親方下での仕事を見出した。そこに3人の旧友がやってきて、彼をライプツィヒへの遍歴に誘ったのだった。この偶然のできごとは彼の生涯にとって「決定的」となった。ライプツィヒに到着したベーベルは、この街がすっかり気に入り、運よく仕事も見つけ、ここに定着することとなる。その彼がほどなく上記設立総会に遭遇したのであった。

「当時ライプツィヒの政治状況は大変厳しかった。ライプツィヒは自由主義と民主主義の中心地の一つとみなされていた。ある日私は、定期購読していた民主派の『中部ドイツ人民新聞』("Mitteldeutsche Volks-Zeitung")の紙面で、教育協会設立総会への案内文を読んだ。この新聞を編集していたのは48年世代のペーター博士(Dr. Peters)で、彼は今は亡き著名な女権拡張運動の先駆者ルイーゼ・オットー=ペータース(Luise Otto-Peters)の夫だった人である。この総会はローゼンタール近くの庭に建っていたヴィーン・ホールという酒場で開かれた。私が酒場に入ったとき、そこはすでに超

42) Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.479ff.

43) Birker, *a.a.O.*, S.52

44) A. Bebel, *Aus meinem Leben*, Berlin 1983, S. 45
以下のベーベルの生いたちも同書より。

満員だった。やっとのことで私は回廊に席を見つけた。それは私が初めて出席した公開集会だった。総合技術協会会長で教授のヒルツェル博士 (Prof. Dr. Hirzel) が基調報告をおこなった。ザクセンでは1854年の連邦決議を根拠に労働者協会が許されていないので、営業教育協会を総合技術協会の第二部門として設立したい、と彼は話した。それに対して反対の声があがった。かつてフランクフルト国民議会の議員であり、フォン・ボイスト氏によって (Herr von Beust) タラント林業専門学校の教授職から追放されたロスメスラー教授 (Prof. Roßmäßler) とともに、ファールタイヒ (Vahlteich)、フリツェ (Fritzsche) その他が声を上げ、協会の完全な独立性と政治的であるべきことを要求した。彼らの意見では、授業目的を追求することは学校の課題であって、成人を相手とする協会の課題ではない、というのである。私はこれらの発言者に賛同はしなかったが、労働者が学識者にこれほどまでに力強く肉迫する姿に感銘を受けた。心の中で私もあのように発言できると願った。」

すでにして ADAV に結集する人々にとっては教育協会は仮の姿であって、政治団体の結成こそが目的であったこと、そしてまた労働者と知識人の間には感情的な溝が芽生えていたことが判明する。しかしこのとき反対派は少数で、協会にとどまった。この晩設立された営業教育協会は、労働者教育とそのための知識人との連携の点で、むしろ模範的なものとなった⁴⁵⁾。教授や博士の肩書きを持つ講師陣は優に10名を超え、英語、フランス語、速記、工業簿記、ドイツ語、計算などの授業がおこなわれた。体操教

室と歌唱教室も開かれ、バーベルは後者に加わり、初心者として第一バスを受け持った。製靴工ファールタイヒは体操教室に、タバコ労働者フリツェは歌唱教室に参加した。会員数も優に500を超えていた。

こうして50年代末から60年代初めにかけて、協会運動再興隆の基礎が築かれた。次に節をあらためて、60年代の動きを概観しよう。

4. 再興隆期

1859年はドイツ政治史の転換点とされる。工業化の進展を背景に、前年には自由貿易を唱える「ドイツ国民経済者会議」(Kongreß Deutscher Volkswirte) が設立されていた。プロイセンでは内閣からの一部反動派の追放と自由主義派の復活により、「新時代」("Neue Ära") が始まった。イタリア統一戦争はドイツのナショナルな刷新という感情を刺激した。ブルジョワジーの台頭と自由主義の新たな展開の時代がやってきた。

そうしたなかで59年には全ドイツの自由主義者の結集を目指した「政治的組織」である「ドイツ国民協会」(Der Deutsche Nationalverein) が設立された。54年決議に基づく弾圧の試みがなかったわけではないが、「ドイツの統一と自由のための国民政党」⁴⁶⁾ という理念と、結社法を避けるために採用した個人加盟の単一組織と中央指導部のみという組織形態によって、弾圧を免れることができた。しかしこの組織形態が逆に欠点ともなった。南北対立の調整がつかず、方針が定まらなかったのである。61年には国民協会を母体として、おもにプロイセンの急進的自由主義者が結集した議会政党「ドイツ進

45) *Ibid.*, S.45f.

46) Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.484

歩党」が結成された。国民協会と進歩党の中には、シュルツェのように、労働者の自助努力に対して援助の手を差し伸べるのは市民の義務だと感じている人々がいた⁴⁷⁾。62年から64年にかけては、54年連邦決議の再考の動きが起り、いくつかの邦で廃止または無効化された。54年時と状況が変わったこと、とくに解散措置を義務付けた第8条が組織の叢生という現状にそぐわないことなどがその理由だった⁴⁸⁾。平行して団結の自由承認を含む営業条令の改正も日程に上っていた。

労働者協会運動にとっての飛躍は、62年に起こった。同年夏のロンドン万国博覧会に向けて、国民協会が2400グルデンの費用を負担して、労働者の代表を12人派遣すると決定したのである。その動機は、アイクのいうように「名誉の義務」⁴⁹⁾ からか、それともナーマンがいうように市民に対して労働者協会のプロレタリア色が弱いことを示して労市提携を強化しようとしたのか⁵⁰⁾、おそらくはその両方であったろう。実施を委託されたのが、国民協会の指導部の一人であり、フランクフルトで週刊誌『雇用主』("Der Arbeitgeber")を編集していたマックス・ヴィルト(Max Wirth)であった。彼は各地の労働者協会に代表の選出と募金を呼びかけた。フランクフルトの教育協会では、呼びかけに応ずることは国民協会の支配下に入ることだと異論が出され、激論の末に組織は分裂した。反対派の中心はのちにラサール(Ferdinand

Lassalle)の後を継ぐ弁護士シュバイツァー(Johann Baptist von Schweitzer)で、自力での派遣を主張したが、まだそこまでの力はなく失敗した。ヴィルトは結局、いくつかの市の協賛もえて、総勢約50人の労働者をロンドンに派遣した。帰国した代表は、各地の協会に出向いて帰朝報告をおこなうことが義務づけられ、その責を果たした。この中から、ばらばらに新設あるいは再建されていた各地の協会を連携させ、統一しようという気運が盛り上がってきたのである⁵¹⁾。

しかし協会運動にはまだ統一的な指導部が存在しなかったため、統一への同じような試みがあちこちでなされた。初めに手を上げたのはニュルンベルクの協会で、62年秋に全国大会を召集した。議題には、営業の自由、全国的な老齢扶助組織の設立、その他当面の課題が提起されたが、バイエルン政府によってこの大会は禁止された。ほとんど同じ時期に、同じ目的で、ライプツィヒとベルリンに全国大会を召集するための委員会が作られた。11月2日にはベルリンで会議がもたれたが、時期尚早論や優柔不断によって予定した大会を延期し、開催場所もライプツィヒに移して、招集をライプツィヒ委員会に委ねることを決定した。このあたりはADAV成立史のヤマ場に差ししかかるところで、詳細はメーリング他に譲るが、この委員会の中に既述のフェールタイヒとフリッチェがいて、二人が組織綱領検討のためにベルリンにやってきたとき、ラサールは二人の心を捉えた。全国大会を準備する過程で、ライプツィヒ委員会の中ではラサールの影響が強まっていった。そして

47) 労働者教育にかかわる上での様々な立場の市民の動機については、Offermann, a.a.O., S.280ff.

48) 54年連邦決議の廃止または無効化の経緯については、Balsler, Sozial-Demokratie, S.491ff. が詳しい。

49) Erich Eyck, Der Vereinstag deutscher Arbeitervereine 1863-1868, Berlin 1904, S.3

50) Na'aman, a.a.O., S.XIII

51) この間の経緯については、Eyck, a.a.O., S.3ff. 参照。

国家援助による協同組合のために普通選挙権の獲得を政治目標の中核に据えることと、(国民協会に類似の)単一の労働者組織と中央指導部という組織原理を骨格とする綱領・規約草案が論議の上、7対4で可決された⁵²⁾。反対したロスメスラーは「ラサールによって引き起こされた分裂に抗議」⁵³⁾して脱退した。こうして63年5月23日、教育協会の性格を完全に脱却した最初の社会主義的な労働者政党が結成されるにいたった。しかし集まった代議員は11の都市から送られた12名にすぎず、会員も数百人という規模で、すでに1万人を越える協会運動のなかで、圧倒的な少数派にとどまった⁵⁴⁾。

ラサール派がしゃにむに独自組織結成に突き進んだという事実は、各地の労働者協会に様々な波紋を投げかけた。ライプツィヒやライン地方のように協会自身が分裂したところもあった。ライプツィヒ協会の最初の分裂はラサールの介入以前のことであるが、ADAV結成に直接つながることなので、少し前後するがベーベルの回想を再び引用しよう⁵⁵⁾。

「(営業教育)協会のトップには24人からなる委員会があった。そこで議長をめぐる闘いが突発した。ロスメスラーは建築技師モテスに敗れた。しかし反対派はいっそう計画的に行動した。1862年2月の最初の設立記念祭で、ファールタイヒが祝辞を述べたが、それは著しく政治的なものだった。彼は普通選挙権を要求した。委員会の改選のとき、私も委員に選ばれた。人々の面前で演説したいという私の渴望は、協会内でたびたびなされた論争の場で、たちまち

充たされていった。のちに友人から聞いたことだが、ある提案を支持するために私がはじめて数分間発言したとき、出席した人々は互いに見つめあって尋ねたと言う、『いま話しているのは一体誰だい?』とね。委員会内に様々な活動分野についての担当部が設置されたとき、私は図書室部と倶楽部に選ばれた。両方で私は部長になった。委員会が再度おこなわねばならなかった協会議長選挙では、このたびは激しい闘いがまきおこった。多数を獲得した候補者がいないまま、選挙が4回おこなわれた。どの選挙でも票は同数だった。結局、ロスメスラー教授は再びモテス技師に1票差で敗れた。というのも、モテスは自分自身に投票したからである。反対派は今度は、1862年の聖金曜日に開催された総会で闘いをくりひろげた。協会は当時500人以上の会員を抱えていた。反対派は彼らのかねての要求、すなわち協会を純政治団体にしてそこから授業を追放しようという要求を再び提起した。何時間も続いた激しい論戦には私も参加したが、そのあげく彼らは、投票の4分の3を獲得した多数派に敗れた。もしも反対派がもっとうまく行動し、ときには時事問題についての政治的講演と討論を開いてほしいと要求したならば、輝かしい勝利を収めたことだろう。しかし彼らが、若い会員たちの大多数にとって最大の関心事であった授業を協会から放逐しようとしたことが、若者たちの反発を招いた。私自身、簿記と速記の授業を受講していたのだ。この決定的な総会の数日前に、フリッチェとファールタイヒは、私を自分たちの陣営に引っぱり込もうと懸命にがんばった。私は彼らについていく決断がつかなかった。」

「反対派はいまや脱退し、『前進』協会を作つて、ホテル・ドゥ・サクスに司令部を置いた。こ

52) Birker, *a.a.O.*, S.55. Eyck, *a.a.O.*, S.9ff.

53) Balsler, *Sozial-Demokratie*, S.486

54) メーリング前掲訳書(下)、58ページ。

55) Bebel, *a.a.O.*, S.46f.

の酒場の主人は、かつて牧師で反動期に追放されたヴェルケルトだった。彼は独特の方法で啓蒙を広め、ついでに商売も営んだ。彼は、有名人の誕生日や命日、政治的な時事問題など、考えるあらゆるテーマで毎週講義を企画し、それを自らおこなった。講義の晩には酒場は人ごみでいっぱいになった。ついには客の間を動き回り、あちこちにグラスビールを配っていたヴェルケルトが、上の階から下へと通じる階段の踊り場に位置どって、そこからみんなに見える形で講義を始めたとき、それはえもいわれぬ印象をかもし出した。・・・この酒場の隅には犯罪者テーブルと呼ばれる大きな丸テーブルがあった。ここには有罪判決を受けて懲役・禁固となるか、あるいは処分を受けた民主派の名誉ある大物たちだけが座ってよいことになっていた。両者はしばしばまたがっていた。そこにはロスメスラーや、5月蜂起参加のかどで死刑判決を受け、その後終身懲役に減刑され、8年間ヴァルトハイムに囚われていたドルゲが座った。・・・我々若者はこのテーブルに座って年長者のとなりでグラスビールを飲むのを許されたときには、特別な名誉と感じたものだった。」

どうやら『前進』協会には加わらなかったベーベルも、その集まりには出入りしていたようである。

「しかしながら『前進』協会の指導者たちは、自分たちの協会の集まりだけでは満足できなかった。彼らは折りにふれては労働者問題や日常問題を論議する労働者・民衆集会を招集し、そこでアジテーションをおこなった。これらの論議はまだ焦点はなはだ定まらぬものだった。労働者の廃疾保険について討論するかと思えば、こんどは万国博覧会のドイツ開催、次には

国民協会への加入といった具合だった。国民協会加入問題では、労働者が支払えるように、3マルクの年会費を月割でも徴収するよう求めた。その他に彼らは、邦議会選挙における普通選挙権、労働者問題に取り組むべきドイツ議会を要求した。さらにドイツ一般労働者会議を招集して、もろもろの要求を論議すべきことが討論された。労働者会議招集の問題はほとんど同時に、ベルリンとニュルンベルクの労働者グループでも提起された。」

ライプツィヒ委員会が設置される時、『前進』協会に参加していなかったにもかかわらず、ベーベルも委員に選出された。しかし62年11月初め、まだ委員会ができてひと月たつたたないうちに彼は委員を辞任した。自分が執行部を努める営業教育協会の活動に全力を注がなければならなかったからである。その上彼はまだ労働者で、朝の6時から夕方7時まで働かねばならなかった。さらに委員会の議論が焦点定まらず、目的意識を欠いていたことが、彼の「辞任を容易にした。」⁵⁶⁾ まだ社会主義からは遠かった彼は教育協会の本来の目的を大切に思い、政治主義についていけなかったのである。そのことは次の回想からもうかがえる⁵⁷⁾。

「1863年2月6日、私はまだファールタイヒと対立していた。ドレスデン労働者教育協会の設立祝賀祭に、彼は『前進』を代表し、私は営業教育協会を代表して参加した。会食の席で、ファールタイヒは挑発的な演説をおこなった。そこで彼は古めかしい口調でこう述べた。確かに労働者は政治教育と人間教育を身に付けるべきだが、初等教育などにかまうべきではない。

56) *Ibid.*, S.59

57) *Ibid.*, S.59

それを労働者に授けるのは国家の役割だ、と。彼は前者に万歳を唱えた。私は行動に駆り立てられた。私は彼に反駁し、一般教育に万歳を唱えた。当たり前だが我々の対立は、好ましい印象を与えなかった。だが私はファールタイヒの挑発に黙っていられなかったのである。ドレスデンの協会が我々と同じ目標を追求していたからには、ますますそうであった。」

ラサールの登場によってライプツィヒ委員会は分裂し、それとともに『前進』も分裂した。4月16日、ラサールがライプツィヒにやってきて、大衆集会で進歩党を攻撃したときには、ロスメスラーとの関係も修復しがたいものになった。こうしてADAVが結成されると、営業教育協会と『前進』との対立が解消され、65年2月には労働者教育協会の名称のもと、両者の再統合が実現した。「営業教育協会に対する総合技術協会の後見は、徒勞であることが明らかになったので、とっくに放棄されていた。」⁵⁸⁾ ベーベルは新協会の第二議長になり、まもなく第一議長の辞任に伴い、その職を継いだ。

このようにまだ多様で分散的な協会運動の中から、ADAVが純化し結晶するかのようには分裂すると、残った協会の多くはただちに対抗結集の道を歩んだ。5月17日と19日に、マインガウの諸協会からなる「中央委員会」が主催してフランクフルトで開かれた労働者集会には、ラサールも出席して激しい論議がなされたが、その中で反ラサール派が結集して呼びかけ文を發表した⁵⁹⁾。

呼びかけはまず、ADAV結成の企てが労働者の共同の課題を妨げるものだとして、協会に

分裂への警戒を促した。そして自己の立場をこう表明し、大会への結集を呼びかけた。

「労働者教育協会は経済的な協同組合と同様に、自助と自己責任という同じ原則から、またすべての自由な人間、すべての自由な人民という真の誇りに足るスローガンから出発したのだが、まさにこの協同組合と同様に、最も激しい抑圧の下でさえも、よりよい未来の芽を育ててきたのだ。一方がこの未来の経済的な土台を創出することでそうしたのに対して、他方はその精神的・道徳的土台を創出し、たゆまず前進させることによって、そしてまた仲間の中に教育と知識を広げることを通じて、共同の課題の明晰な理解、個々人の個人的能力、また同時にあらゆる成功の前提条件を促進し、普及することによって、そうしてきたのだ。」

ここには明らかにシュルツェ＝デーリツチュの精神に導かれた自由主義の理念が見て取れる。末尾に署名したのは、ベルリン、カッセル、マンハイム、ニュルンベルクの各労働者教育協会、ケムニッツ労働者継続教育協会、デュッセルドルフ手工業者協会、およびマインガウ労働者中央委員会であった。

こうして63年6月7日、フランクフルトで第一回「ドイツ労働者協会会議」が開かれた。大会には48の都市から54の協会が集合し、その代議員110人は全国17580人の会員を代表していた。さらに外国を含む多くの協会・個人から委任状、祝賀状、祝電が届いた。3週間足らずという準備期間の短さからみても、それはナーマンの言うように確かに「即興の⁶⁰⁾」大会であったが、それだけにまた躍動感のあるものでもあった。反ラサール、ならびに、市民と労働者

58) *Ibid.*, S.64

59) *An die Arbeitervereine Deutschlands*, in: Eyck, *a.a.O.*, S.23f.

60) *Na'aman*, a.a.O., S.XV

の協力によって教育を中心とする協会運動を推進するという点で、大まかな一致はあったが、自由主義派、民主主義派、労働者独自性派など力点の置き方には初めから違いがみられ、それゆえに緩やかな連合体を形成したにすぎなかった。たしかにそれは「労働者階級の結集ではなく、労働者協会の結集」⁶¹⁾だったのである。しかしともかくもこうして個々の協会の孤立は克服され、各協会は常設機関である12人からなる常任委員会に接続された。常任委員会の最大にしてほとんど唯一の仕事は、次期大会を招集し、準備することだった。常任委員会は議長に南ドイツ民主派に属す新聞編集者ゾンネマン (Leopold Sonnemann) を選んだ。

以後、「会議」は64年を除いて68年まで毎年大会を開いた。大会論議の分析は別稿に譲るが、68年にニュルンベルクで第五回大会を開いたときには、ベーベルはすっかり立場を変えて、社会主義者になっていた。この大会でベーベルは、リープクネヒトと協力して、ちょうど5年前にラサールがおこなったのと同じことを、今度はしかし多数派としておこなった。彼はマルクスの剰余価値論とインターナショナルの原理に基づく政治綱領を提起し、VDAVの政党化を目指したのである。提案は69対46票で可決され、少数派に属した26協会の代議員は抗議文を読み上げて、退場した。残ったVDAV新執行部は、協同組合、扶助金庫などの「社会政策的」課題を近く設立予定の労働組合に委ね、純然たる政党化の道を決定した。教育の課題はとくに彼らの念頭からは消えていた。そして翌年10月のアイゼナッハ大会で、VDAVは「社会民主労働党」(Die Sozialdemokratische Arbeiter-

partei)に発展的解消を遂げ、政党化を完了したのである⁶²⁾。

5. 分裂以後

分裂ののち社会主義系の協会がすべて社会民主労働党の中に吸収されたわけではなく、ライプツィヒやドレスデンには社会主義的な協会が残ったが、そのような協会では社会主義政党の党員になるための政治教育と組織教育に重点が置かれ、本来の教育は後景に退いた。社会主義者自身が認めるように、「ラサールの早逝以後25年間、労働者教育はドイツ社会民主主義の中の特別な活動としては、何の役割も果たさなかった」⁶³⁾のである。1878年に社会主義者鎮圧法が公布されると、いくつかの協会は解散し、いくつかは名前を変えて党員の隠れ蓑として存続した。社会民主党内で労働者教育が再び真剣に意識されるようになったのは、1891年のベルリン労働者教育学校設立以後のことであった⁶⁴⁾。しかしまだ地方的なものにとどまり、ザクセンやハンブルクの党には教育への消極性がみられた。教育の本格的な復活は大衆政党になってからのことで、1906年マンハイム党大会は中央教育委員会の設置と党学校の設立を決定した。校長はハインリヒ・シュルツが勤め、講師にはヒルファーディング (Rudolf Hilferding)、パンネケーク (Anton Pannekoek) がいて、のちにロー

62) Eyck, *a.a.O.*, S.83ff.

63) Birker, *a.a.O.*, S.83 この発言をしたハインリヒ・シュルツ (Heinrich Schulz) は社会民主党党学校の校長兼党中央教育委員会事務局長を務めた。

64) 1890年代以降の社会民主党による労働者教育については、Dieter Langewiesche, *Arbeiterbildung in Deutschland und Österreich. Konzeption, Praxis und Funktionen*, in: Werner Conze/Ulrich Engelhardt (hrsg.), *Arbeiter im Industrialisierungsprozess*, Stuttgart 1979

61) *Ibid.*, S.XV

ザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg)、クーノウ (Heinrich Cunow) などが加わった⁶⁵⁾。しかしいずれにせよ政治色の濃い教育がおこなわれてことに変わりはない⁶⁶⁾。

これに対して自由主義系の協会は、VDAVの政党化に対してひとたびは対抗結集を模索し、ドイツ労働者同盟 (Der deutsche Arbeiterbund) を設立した。だが、この組織はすぐに雲散霧消し、結局労働者協会は多様な方向に分裂し、分散化した。しかしマインガウやバーデンのように以前からあった地域連合が存続しつづけたところもあった。また、北西ドイツ、バイエルン、ファルツ、南ドイツでも70年から76年にかけて、それぞれ比較的大きい地域連合が設立された。76年にできた南ドイツのものは、「シュルツェ的原理に立脚する」⁶⁷⁾ 24の協会からなり、1845人の会員を擁した。しかしながらビルカーによれば、地域連合の活動はバーデンを除いてしだいに衰退していったという。バーデンのそれは、94年の第11回大会で「バーデン高地労働者協会連合」(Verband Badischer Oberlandischer Arbeitervereine) から「バーデン労働者教育協会連合」(Verband Badischer Arbeiterbildungsvereine) と名前を変え、1917年には52協会、9126人の会員を抱え、1931年にも存続していた⁶⁸⁾。だがこれらを統合する形での、労働者教育協会の「下から」の再結集はついになかった。

一方、自由主義の立場から協会運動にかか

わった市民や知識人、および彼らに近い人々の間で、新しい動きが起こった。1871年7月13日、「民衆教育普及協会」(Die Gesellschaft zur Verbreitung von Volksbildung)が、自由主義的教育運動を全国的に展開するための市民の組織として設立されたのである。設立発起人は次の人々だった⁶⁹⁾。

シュルツェ=デーリッチュ (第一議長)、フランツ・ライビング博士 (Dr. Franz Leibing) (第一事務局長)、フリッツ・カレ (Fritz Kalle)、フランツ・ドゥンカー (Franz Duncker)、マックス・ヒルシュ博士 (Dr. Max Hirsch)、ミケル (Miquel)、フリードリヒ・カップ (Friedrich Kapp)、ボルジヒ (August Borsig)、A. ブレーム博士 (Dr. A. Brehm)、グナイスト博士 (Dr. Gneist)、フォン・ホルツェンドルフ教授 (Prof. von Holtzendorff)、アウグスト・ラマース (August Lammers)、ルドルフ・パリシウス (Ludolf Parisius)、ヴェルナー・ジーメンス博士 (Dr. Werner Siemens)、ルドルフ・フィロシュ教授 (Prof. Rudolf Virchow)、フランツ・ヴィルト (Franz Wirth)

知識人が圧倒的で、実業界からも何人か加わっていたことが分かる。この協会は機関誌『教育協会』("Der Bildungs-Verein")を発刊し、その創刊号で設立の趣旨をこう書いた⁷⁰⁾。

「この雑誌で我々は、祖国ドイツで国家的な原動力や『上から』の介入なしに、自由な愛から知の育成と役立つ知識の普及のためにみずから教育してきたすべての協会と機関、すべての団体と学校、すべてのグループに挨拶を送る。

65) Birker, a.a.O., S.84

66) ランゲヴィーシェ前掲論文の末尾に社会民主党地方教育委員会のカリキュラムが載っている。また、D. Langewiesche, *Zur Freizeit des Arbeiters*, Stuttgart 1980 も参照。

67) Birker, a.a.O., S.85

68) *Ibid.*, S.85

69) *Ibid.*, S.85

70) *Ibid.*, S.85f.

これら諸団体の起源は、国教会のように中世の何らかの経典上の考えに由来するのではなく、また藩校のように絶対的国家的権力に由来するのでもないがゆえに、我々はこれらの団体をドイツの国民的文化そしてまた人間的文化のもっとも気高い芽生えの一つとみなすものである。これらの組織の一部がいまのところいかに不完全であろうとも、未来は彼らのものであると我々は確信している。なぜならばその担い手たちは、歴史的発展を見渡しうるかぎり、あらゆる偉大な思想が勝利を達成するのを助けた、あの特性を備えているからである。すなわちそれは、人類への愛、まさに恵まれぬ階級との共感、道徳のもっとも純粋な源泉である知への最高度の関心、そして真理と認めたものを実際の生活組織へと転換する勇氣、である。』

同誌第2号では、教育を受けた者と受けない者との間の巨大な裂け目を、保守反動派や左翼などが利用し、「近代の精神文化に対する闘争へと精神的に蒙昧な大衆を導こうとしている」⁷¹⁾と警戒を呼びかけた。

みられるようにこの協会は、自由主義的市民・知識人のイニシアティブによって、分散状態にある既存の自由主義的教育運動を、いわば「上から」統合しようとするものだった。71年末までに71の協会がこの組織に加わった。その中には、営業協会14、手工業者協会7、労働者（教育）協会7があった。翌年、最後の6つが加わって、労働者（教育）協会は全部で13になったとはいえ、かつての教育運動に比べて労働者協会の比重の低下は明らかだった。社会主義系の協会や労働者の独自性を重視する協会が加わらなかったことがその一因であったが、他

方では自由主義的な労働者教育運動の理念と組織が少なからずヒルシュ・ドゥンカー労働組合に吸収されたということもあずかっている。また、自由主義的市民・知識人が主導した結果、個々の職業別の継続教育よりも一般教育を重視することになり、労働者の願望との間に齟齬をきたしたことも十分考えられる。参加した労働者協会は、一般教育協会に転換し、他の地方協会とともに普及協会の支部となった。教育協会と名乗るものは、たとえ名称は変わらなくとも、相互扶助や協同組合も兼ねていたかつての複合的な性格を失い、純然たる教育団体になっていったのである。そして初めは手工業者的性格を強くとどめていた普及協会は、やがて、とりわけ第一次大戦後、教員と知的市民の組織へと変貌していった。すなわち1931年におけるその構成員の比率は、教員等55、聖職者7、校長5.4、一級教諭3.1、教頭0.6、官吏5.3、医師1.7、教授2.2、博士1.6、法律家2.0、文筆家2.4、工場・銀行取締役2.4、商人7.2、各パーセントであるのに対して、営業者は3.8パーセントにすぎなかった。労働者にいたっては皆無に近い状態となった。ただし、まだ労働者と手工業者が多く加盟していた既述の地域協会連合とその後身、たとえばバーデン労働者教育協会連合、89年設立のフランクフルト民衆講習委員会（Frankfurter Ausschuss für Volksvorlesungen）、99年設立のライン・マイン民衆教育連合（Rhein-Mainischer Verband für Volksbildung）などが、これもそれぞれに純然たる教育団体へと変化しつつも、民衆教育普及協会と密接な協力関係を形成していた⁷²⁾。

こうして、社会主義者との分裂ならびにヒル

71) *Ibid.*, S.86

72) *Ibid.*, S.86f.

シュ・ドゥンカー労働組合の設立以後、自由主義の理念に基づく労働者教育運動は、市民・知識人の主導の下に展開され、労働者の主体的なかわりという点では、きわめて脆弱なものになっていったのである。

III. おわりに⁷³⁾

小論からもうかがわれるように、社会主義者・共産主義者は、全人教育や職業教育という意味での労働者教育をまじめに検討し、取り組んでこなかった。それがイデオロギー自体に由来するのか、それとも状況に規定されたものなのかは、ここでは問わない。しかるに自由主義は、序文で述べたように、それが十全に機能するためには、労働者を含めて各人の主体的能力を向上させなければならないという課題を、不可分なものとしてもっている。とりわけ工業化の初期局面で、新たに登場した労働者や没落し

つつある手工業者が、劣悪な状態に置かれたままであることに対して、どのように対処するかは、当時の自由主義者にとって焦眉の課題であった。だが社会主義者たちが分離独立するに依じて、市民・知識人主体の教育運動は、理念重視、一般教育重視、そしてまた「個人主義的上昇」⁷⁴⁾に偏る傾向をみせた。労働者自身の教育への欲求にもとづいた自由主義的教育運動は、ヒルシュ・ドゥンカー労働組合設立ののちは、同労組に引き継がれていった。そこでは労働者問題とは単なる「胃の腑の問題」ではなく、労働運動は教育による人間の向上をも目指す「文化運動⁷⁵⁾」であるという理解がいきわたっていた。人間の自由な発展と物的劣悪との間の矛盾を除去することこそ、労働組合の固有の政治的な「文化課題」⁷⁶⁾だというのである。そこからフレックは、ヒルシュ・ドゥンカー労組こそ「労働者教育協会運動の真正の相続人⁷⁷⁾」だと位置付けた。

とはいえ、自由主義的教育運動が高揚を見せたのは、工業化の初期局面であり、歴史的にみてきわめて限定的であったことも事実である。このような形での教育運動（すなわち市民・知識人との連携、複合的な組織形態、各種傾向の混在、等）の高揚は、この時期特有のものだったといえるのである。その後自由主義系の運動や組織は停滞し、代わって社会主義系のそれが躍進する。それはなぜか。こうはいえないだろうか。労働者・手工業者は工業化の初期局面において、著しい経済的苦境、政治的抑圧、権利や社会的承認の欠如という困難な状況に置かれ

73) イギリスにおける労働者教育運動との比較は興味深い問題であるが、私の手に余るものでもある。さしあたり小関隆「ヘンリ・ソリと労働者クラブ構想：『合理的レクリエーション』の試み」、『東京農工大学一般教育部紀要』第31巻参照。同論文はイギリスとドイツの労働者教育運動における共通性と差異について貴重な示唆を提供してくれる。共通点としては、初期における市民の協力と指導、その際の動機が労働者の自助努力に対する援助にあったこと、のちに労働者の独自性が強まること、政党政治に対して距離をおこうとしたこと、などが挙げられよう。差異としては、イギリスにおける娯楽のウェートの高さ、キリスト教聖職者とその指導による禁酒運動の独自の役割などが目に付くが、理念的な面での差異は「エレヴェイション」の含意にあるように思われる。ドイツの場合、教育を通しての向上が「市民として」の向上、すなわち第4身分を脱却して「市民」に成り上がっていくことを目指したのに対し、イギリスの「エレヴェイション」はあくまでも労働者階級としての向上を目指しているように思われるのである。しかしこの点はまだ直感にとどまるもので、これ以上論ずることはできない。あわせて、小関隆編『世紀転換期イギリスの人びと—アソシエーションとシティズンシップ』人文書院、2000年も参照。

74) Langewiesche, *Arbeiterbildung*, S.454

75) Anton Erkerenz, *Arbeiter-Katechismus*, Berlin 1908, S.70

76) Fleck, *a.a.O.*, S.97

77) *Ibid.*, S.100

ていた。そのことに鋭く反応し、教育や宣伝を通じて状況のメカニズムへの理解を深め、解決の方向を自覚するようになった、若く血気にはやる労働者が、教育などという悠長なことの前に、一刻も早く取り組むべき政治的・経済的課題が存在していると考えるのは、きわめて自然なことなのではないだろうか。だとすれば教育を通じて政治的自覚を高めるほどに、教育を否

定ないしは軽視する社会主義に行き着くという、いわば構造問題をこの時期のドイツは抱えていたといえるだろう。こうして自由主義的な労働者教育運動はせっせと自己の足元を掘り崩したのである。ベーベルがその証人であった。

〔北海学園大学経済学部 教授〕

表 三月前期および革命中の各種教育機関の成立

読 書 協 会	民 衆 図 書 館	手 工 業 者 ・ 労 働 者 (教 育) 協 会
1795 フランクフルト「博物協会」		
1800頃 マルク伯領で20の読書協会、ライプツィヒ「博物協会」、ドレスデン「博物協会」	1800 マインツ「市立図書館」 1805頃 バイエレンで「村図書館」	
1817 ダルムシュタット、ハレベルリン、ギーゼン	1810 グンビネン「市立図書館」	
1826 フライブルク学術読書ホール、	1823 デッサウ「市立図書館」	
1831 カッセル読書博物協会	1828 グローゼンハイン「市立図書館」	
1833 ビーネ、スイス・ドイツ職人のための読書協会	1829 パイネ	1833 スイスでドイツ人手工業者(教育)協会
1834 ラドルフツェル読書協会	1830頃 ザクセンで民衆図書館	
1836 ジュネーヴ・ドイツ職人のための読書協会		1840 オスナブリュック手工業者協会、ロンドン・ドイツ労働者教育協会
1842 クール、チューリヒ、ルツェルンで手工業者読書協会	1843 カッセル市立図書館	1842 シュトラスブルク(既存)
	1844頃 ヴェストファーレンで民衆図書館	
	1844 プッシュェドルフ「民衆図書館」	1844 ベルリン、マンハイム(1847まで)
1845 マンハイム民衆読書協会	1845 フランクフルト「民衆図書館」	1845 ハンブルク
		1846 キール、エルバーフェルト
1847頃 ニュルンベルク、ダルムシュタット、フランクフルト、ハノファー、プラハで既存読書協会の、「無料利用化」。ザクセン王国に7つの教育・読書協会		1846/47 マクデブルク、オルデンブルク、アルトナ、ヒツァッカー、プレーメン、ダンツィヒ、ライプツィヒ、オッテンゼン、ノイミュレン、エアランゲン
		1847 コーブルク、ライプツィヒ、アンナベルク、ロスヴァイン、フライベルク、ケムニッツ
		1848 カールスルーエ、プレスラウ、ケルン、フランクフルト、ケーニヒスベルク、ボン、ラール、ヴェルトハイム等。
1848 アルメンツホーフェン	1850 ベルリンで4つの民衆図書館	1849 マンハイム、ハイデルベルク、ヴァインハイム、他多数。

資料) F. Balsler, *Erwachsenenbildung*, Anlage